

# 生活・社会科学的探究を通して生きる力を育成する

東京都立目黒高等学校 坂口克彦

## 1. はじめに —「総合学習世代」一期生の卒業にあたって—

平成15(2003)年度より、文部科学省の定める「学習指導要領」が改訂され、小中学校でいち早く導入されていた「総合的学習の時間」が高等学校においても3単位の必修科目として教育課程の中に組み込まれることになった。本年度は高等学校における「総合学習世代」一期生が卒業を迎えることになった。

東京都の各校の様子を調査した結果、「総合的学習の時間」の学年配置については、おおまかに次の4パターンに分けられると判明した。<sup>1)</sup>

①「1年1単位、2年1単位、3年1単位」の均等配置、②「1年1単位、2年または3年で2単位」の予備的段階＋本格段階という分割配置、③専門高校等の「課題研究」による読み替え措置、④その他の配置という4つである。

その中で筆者の勤務校では、上記④の特殊な配置をおこなった。具体的には「3年で3単位まとめ取り」という配置である。<sup>2)</sup>

したがって本稿では、全都いや全国でも珍しい形である「まとめ取り型」による総合的学習の初年度の実態を報告したい。そして、その中で地理歴史・公民科がどのように貢献でき得るのかについて、その試みについて紹介したいと考える。

## 2. 「総合」の評価

筆者の調査によれば<sup>3)</sup>、高等学校における「総合学習世代」一期生は、既に義務教育学校での「総合」を経験してきている。テーマ学習、校外訪問、講演受講、進路ガイダンス的なものなど、経験しているジャンルは様々である。高等学校側に関わる例を挙げれば「上級学校訪問」や「推薦入試用自己紹介ポートフォリオ作成」などがあつた。特に後者では、推薦入試の面接時に受験生がスケッチブックやクリアファイルなどを持ち込み「総合学習での学習の成果として、これを紹介してもよろしいでしょうか？」のように依頼されるという事態が筆者の勤務校の各面接会場で続出した。このような実用的側面を持つ教育がなされていることもあつてか、義務教育学校での「総合」について、生徒の94%が肯定的評価を与えている。

一方で高等学校での「総合」は、平成15年度導入校の多くから既に苦戦が伝えられた。その第1の理由は義務教育学校での経験があるために新鮮味が失われたこと、第2は高等学校での実践は義務教育段階での実践と比べて外部指導者や外部訪問に頼らずに「自前」での形式をとることが一般的である

ため生徒の興味関心を維持するのが難しかったこと、第3は一般的な評定も付けないことになっているためにホームルームの延長のように扱われてしまったことなどが推測される。このため「総合」の出席率が極端に下がって単位修得が困難となる事例も出て、一部の高等学校では必履修の「総合」だけが未履修となって進級が困難となったのは不服だとして裁判沙汰になる事態すらも生まれたという。

このような情報を得た上で平成17年度にようやく開始した筆者の勤務校での「まとめ取り型」の実践では、上記のような深刻な事態を避けるために2つの工夫をおこなった。

第1は、5段階評定の導入である。成績評定がないものと生徒に軽んじられる事態を防ぐために、A・B・C・D・（未認定）という5段階の評定を通知表上には表記することとした。もちろん、生徒指導要録には文章による記述が必要だが、生徒指導上の特別措置ということで教員間の同意を得た。第2は、第3学年に3単位を集中させている特色を生かして一般の選択科目と同様の扱いをすることである。筆者の勤務校の場合、第3学年では必修科目が5科目しかなく、自由選択枠を大きくしている。そこで、この「総合」も選択科目の一つのような形で募集を実施し、生徒の違和感の除去に努めようとする工夫をおこなった。その結果、筆者の勤務校における「総合」の肯定的評価率は高く<sup>4)</sup>、単位不認定者も一人も出ることがなかった。

### 3. 「総合」に地理歴史・公民科はどのように貢献でき得るのか

高等学校学習指導要領に定める「総合的学習の時間」のねらいは、以下の通りである。

〔1〕．総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。

〔2〕．総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。

(1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(2) 学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。

以上のねらいのもと、文部科学省は3年間で3単位を学習することをうたっている。

このような特色を持つ「総合」に地理歴史・公民科が貢献できる点が多い。数多くの高等学校で地理歴史・公民科教員が先頭に立って実践している様子が社会科教育関係の学会や研究会であまた報告されている。

我が「都倫研紀要」でも、既に第40集(2002年)で村野光則がグループワーク・トレーニングの導入について論じ、第42集(2004年)で原田健がキャリアガイダンスを含めた「総合」に倫理教員が積極的に関わっていくことを強く提言している。

今回、筆者が自らの実践を踏まえて提言したいのは、「社会の中で生きる力を育成する」のに貢献する地理歴史・公民科的発想の導入である。

もちろん「第3学年で3単位まとめ取り型」という特殊条件もあるが、週3単位という十分な時間が与えられることによって、より深い問題解決・探究活動が可能になるとともに、第3学年という時期にこの講座を実施することによって、自己の在り方生き方と関連させることも容易になると考えられる。また、「自ら課題を見つけ、探究する」という「総合」講座の目標は、それまで2年間にわたって各種の行事・ホームルーム活動・委員会活動・クラブ活動などで養ってきた精神力と学習活動で培ってきた基礎的能力を駆使した3年間の総まとめとして位置づけるのに適していると言えよう。

#### 4. 「社会の中で生きる力を育成する」ためには

筆者の勤務校においては、“大テーマ”として「社会の中で生きる力を育成する」というスローガンを掲げ、この“大テーマ”に基づき、その下部構造として3つの“中テーマ”を設けた。その3つとは、①：「自然科学的探究を通して、生きる力を育成する」、②：「生活・社会科学的探究を通して、生きる力を育成する」、③：「文化・芸術科学的探究を通して、生きる力を育成する」とした。そして、これら“中テーマ”3つに対して、さらに下部構造に位置する“小テーマ”を合計11講座用意し、この中から1つを選択して履修させることとした。

【表1】大・中・小テーマの構造

◎ 大テーマ：「社会の中で生きる力を育成する」		
● 中テーマ ①：	● 中テーマ ②：	● 中テーマ ③：
「自然科学的探究を通して 生きる力を育成する」	「生活・社会科学的探究を通して 生きる力を育成する」	「文化・芸術科学的探究を通して 生きる力を育成する」
○小テーマa「総合的に自然科学を探究する」	○小テーマc「青年期の課題と現代社会」	○小テーマh「日本文化研究」
○小テーマb「数学を解く楽しみ」	○小テーマd「国際化社会を生きぬくには」	○小テーマi「暮らしの中の書」
	○小テーマe「国際語としての英語を学ぼう」	○小テーマj「現代と表現」
	○小テーマf「自分らしい生活をつくる」	○小テーマk「音楽の近代的表現」
	○小テーマg「生涯スポーツの理論と実践」	

それでは、地理歴史・公民科はどのように「生きる力の育成」に貢献でき

るのか。

「総合学習世代」一期生に対して、筆者の勤務校では2講座を用意した。前表の中テーマ②である「生活・社会科学的探究を通して生きる力を育成する」に属する小テーマcの「青年期の課題と現代社会」、小テーマdの「国際化社会を生きぬくには」である。

これら2講座を、前者は公民科教員、後者は地理歴史科教員が1名ずつで担当した。また3単位の置き方は、水曜2限と木曜5～6限という形とし、連続時限を設けて作業学習などの便宜も図った。

下に掲げるのが生徒に配布した講座紹介である。その結果、小テーマc講座は11名、小テーマd講座は全講座中の最大人数である31名もの受講者を集めた。

## 【表2】 講座紹介文

### ● 中テーマ ②：「生活・社会科学的探究を通して、生きる力を育成する」

#### ○ 小テーマ c：「青年期の課題と現代社会」

この講座では、以下に掲げるような生徒諸君にとって身近な問題から社会認識を深めることを目指してゆく。  
具体的には、発表や論文作成を実施する予定である。

【 探究課題として考えられるテーマ 】

- ◆ 私たちを取り巻く社会的な問題
- ◆ 青年期の葛藤

などを、自ら主体的に探究してゆくことが目標である。

#### ○ 小テーマ d：「国際化社会を生きぬくには」

この講座は、グローバル化してゆく社会の中で、人類のかかえる諸問題をとらえ、問題の実態や発生理由あるいは対策の実例と将来展望などについて考察することを目的とする。生徒諸君が自ら課題を選択し、世界各地や日本国内における諸問題について、自ら情報検索を行い、必要に応じて自ら地域調査などでも行うという方式を組み込んでゆきたい。さらに報告書・論文作成やプレゼンテーションなども実施することによって、国際化社会の中で生きぬいてゆける「本物の力」を身につけてゆくことを目標としたい。

【 探究課題として考えられるテーマ 】

- ◆ 人口問題 ◆ 民族問題 ◆ 都市・村落問題 ◆ エネルギー・環境問題 ◆ 食糧・貧困・飢餓問題
- ◆ 生産と消費に関わる問題 ◆ 国際協力に関わる問題 ◆ グローバリズムとナショナリズム
- ◆ 国際人たるべき前に、まず日本固有の文化を知ること
- ◆ 世界自然遺産・世界文化遺産を守ってゆくには
- ◆ NGO活動とはどういうものかを知ろう
- ◆ 国際化社会と日本 — 邪馬台国以来続いてきた日本の対外交渉史について — など。

## 5. 生活・社会科学的探究を通して、生きる力を育成する

### (1) 「青年期の課題と現代社会」講座

この講座は、11名の受講生を集めたが、何とそのすべてが女子生徒という構成となった。そのため、講座内容としても女性を意識した教材を使用したり、少人数制の特性を生かして受講者側からの希望を加味した教材を用意する工夫を施した。

講座展開の基本は「映像紹介－討論－論文作成」という流れである。

第1にはまず「映像紹介」部分について紹介したい。受講生の希望テーマとして多かったのは、風俗関係論・女性心理論のほか、虐待や「酒鬼薔薇」事件またはコンクリート詰め殺人などといった犯罪心理論、そして同世代の少年少女を取り巻く問題であった。

そこで、ギリシャ神話を題材とした『オイディプス王』、『王女メディア』

を使うことによって神話から見る女性心理を探究することを試みた。さらに現代物では、ベトナム戦を背景に子どもへの抑圧と性的な問題及び思春期病棟を描く『17歳の家族』、誕生の時に母が亡くなり死に対するトラウマを持ってしまった少女が父の再婚と継母との葛藤を乗り越えていく様子を描く『マイガール』、母が殺人事件を起こしたのをきっかけに自分の少女期を振り返る中で母娘の秘められたトラウマを明らかにしていく『黙秘』などを用いて、前記の受講生の希望テーマに合わせた形での映像紹介をおこなった。

また、きょうだいの葛藤を描く『エデンの東』やロボットが人格を持つというSFの『レプリカント』なども取り扱ったほか、アニメーション作品ではあるが宮崎駿『魔女の宅急便』を自立する女性を扱った作品として紹介した。

前述のような選択者構成のアンバランスさもあって、これらの映像作品の中で男性を主人公にしたもの（『エデンの東』、『レプリカント』）については、やや食い付きの悪さが見られたものの、殆どの作品は概して好評であった。

第2には「討論」について紹介したい。前記の映像紹介の後に受講生と担当教員による討論を実施したのはもちろんだが、それ以外に特別テーマを設けての討論も実施した。

テーマとして掲げたのは、①：学校の中について、②：オタクについてなどであった。

①については、生徒にとって一番身近な問題であるが、映像紹介で同世代少女の心理を描く作品を見ていることもあってか、学校行事のことなどについて表面的な議論に留まらずに自分だけでなく他の生徒の心理にまで踏み込んで、かなりの本音が噴出した討論が展開された。②においては、社会現象の分析やオタクにはまる心理についての討論に留まらず、「合体ロボのテレビ放映とスポンサーのおもちゃメーカーとの関係」などという経済分析にまで達する深い議論まで可能となった。

第3は「論文」について紹介しておきたい。第3学年ということもあり、提出は第1学期末と第2学期末の2回とした。テーマは自由としたが、実際は映像紹介時のテーマのまとめが多かったが、進路・人間関係など自分自身の悩みを分析する論文も見られた。

## (2) 「国際化社会を生きぬくには」講座

こちらの講座は男子16名、女子15名で全講座のうちでの最大勢力となる31名が受講した。その分、一人一人の作業がバラバラになるような課題探究活動は難しく、「個人探究活動とグループ探究活動」に分け、「個人探究活動：グループ探究活動」の比率は2：3に設定した。つまり、年間を通して5テーマを設定して探究させることとした。

第1のテーマは「高校生の意識から“国際化”を考える」とした（4～5月）。受講者を約10名ずつの3グループ(グループ内には必ず男女が混合するようにする)に分けて、それぞれが小テーマを作り、プレゼンテーションを実

施した後に冊子を作成させるというスタイルをとった。なお研究にあたっては必ず高校生を対象としたアンケート調査とその分析を課した。その結果、各グループは①：日本の良いところ&日本の悪いところ、②：異食文化、③：反日感情というテーマを設定した。そして発表用資料を伴ったグループプレゼンテーション発表会を実施したのち、ワープロ打ちで平均15ページ程度の冊子を完成させた。

ここでは、校内外の高校生世代だけでなくその他の世代、さらにはインターネットを利用しての海外の不特定多数の人々にまで調査を実施するグループも出た。<sup>5)</sup>

第2のテーマは「日本の伝統文化を外国人に紹介しよう」と題して“歌舞伎”学習を試みた(6～7月)。例年、この時期に千代田区半蔵門の国立劇場が実施している「歌舞伎教室」を見学するという点を焦点にして、その事前事後学習を含めた企画とした。この企画に、他の講座も一緒に参加しようということになり(音楽表現系講座・美術表現系講座・日本文化研究系講座)、総勢80名程度での観劇を行うこととなった。そこで、この「国際」講座ではグループワークによって歌舞伎についての事前学習を行い、歌舞伎教室観劇前日に他の講座の受講生に対して紹介する形でプレゼンテーションを行うこととした。

今回は男女混合の6グループに対して、以下の6つのテーマから1つを選択させて研究を行わせた。①：歌舞伎の舞台について、②：歌舞伎の音楽について、③：歌舞伎の歴史における男優と女優について、④：歌舞伎の様式美—衣装と化粧法について—、⑤：歌舞伎に関連する伝統芸能について、⑥：「毛抜」という今回の上演作品について

当日は、紙の資料ではなく、パワーポイント画面の投影によるプレゼンテーションとした。前回の自講座内プレゼンテーションとは異なり、大人数に対する発表ではあったが、グループだったこと、一度経験していたことなどもあって、各グループとも堂々たる発表で、成功裡に終わらせることが出来た。

第3のテーマは「留学生に“日本”を伝える」と題してグループワークをさせ、再びパワーポイント画面によるプレゼンテーションと冊子作成を実施した(9～10月)。

今回は第2テーマである歌舞伎だけに限らず、さらに枠を広げて①：日本刀、②：祭、③：和服、④：京都、⑤：侍、⑥：茶という6テーマを掲げてグループ研究をさせた。

そして第1弾としてプレゼンテーションを行わせたが、祭の音声を入れるグループや、あるいは茶を点てる実演を行うグループが生まれるなど、それまでの2度のプレゼンテーション経験からか、出来上がったものはプレゼン技術的には磨きのかかったものであった。

しかし、そのプレゼンテーションはあくまでも受講生対象、つまりは日本の高校生対象に考えれば洗練されたものであったが、本来のテーマである「留

学生に“日本”を伝える」という目的とは合致しないものであった。つまりは、表現が難しすぎたり、量が多すぎたり、日本人であるという前提がないと理解できないものなどが随所に見られる発表ばかりであったのである。そこで、授業者はプレゼン終了後「これでは納得できない。題意に適さない。」と受講生に対して、再度「留学生に“日本”を伝える」のに値するプレゼンテーションの台本を作成することを指示した。

日本語が最低限の能力しかなく、かつ日本文化を殆ど知らない留学生をクラスに迎えたと仮定し、絞り込み・厳選を重ね、いかに平易な表現で、最終目的である「文化を伝える」ことに近づけるかということにトライさせた。時間の都合と既に推薦入試只中にある3年生であるという特殊事情から、再プレゼンを行わず、台本の作成と冊子化で留めたが、その完成した冊子を用いて受講生同志で前回プレゼンとの差を相互評価しあう等の工夫も試みた。

6)

第4のテーマは「音楽を通して世界を知る」である（10～12月）。今回は個人探究活動とした。以前に「高・大連携行事」でお世話になった武蔵野音楽大学の協力を得て、大学内の楽器博物館を訪問して見学することにより、世界の民族楽器に親しんだり、その共通性や相違性を認識することを目的とした。「歌舞伎教室」の時と同様に、他の「総合」講座（音楽表現系講座）との合同での訪問活動としたが、「国際」講座では予め受講生に一人で一楽器を担当するという事前予習課題を与え、訪問当日にもその楽器についてはかなり力を入れた見学を行わせ、あとでレポートさせることとした。事前学習では図書やインターネットでの検索をさせたり、訪問前日には音楽表現系講座と合同で、民族楽器に関するDVD映像を流すなどして意識を高めるようにした。推薦入試期間ということで当日は数人の欠席者が出たものの、上記のようなバックアップ調査も可能で、事後報告書作成には支障は出なかった。<sup>7)</sup>

第5のテーマは「国際協力を考える」である（12～1月）。一般入試期にあたるため、こちらも個人探究活動とした。今回は、①：キミの考える国際協力とは、②：今、キミ自身にできる国際協力とは、という2つの大きなテーマを与え、図書やインターネット検索を駆使しつつ、レポートさせる方式をとった。<sup>8)</sup>

これまでは受講生自身が図書やインターネットで情報検索を行い、プレゼンテーションも行う形式であったが、一年間の最後となる今回のテーマでは、逆に授業者が「国際協力を考えるー直接協力と間接協力の両輪をー」と題して自らの国際協力経験も織り交ぜたパワーポイントによるプレゼンテーションを3回に分けて実施した上で、レポート作成に入らせた。個人探究活動であるため、どうしても或る程度の進度差が出たが、時間に余裕の出た受講生は自分自身の経験や進路と重ね合わせた討論を行うまでに発展させた。

## 6. 今回の「総合」の実践は、果たして生きる力を育成するのに役立ったのか

筆者の勤務校における実践の場合、1年間の「3単位まとめ取り型」である以上、「生きる力」育成の効果を検証するという事は容易ではない。ただし、3年生での実施ということもあり、受講生の進路ということには直結するし、表面的に見える部分も幾つか出てきているので、以下に紹介したい。

「青年期の課題と現代社会」講座では、自分たちと同世代の心理を深く分析したことから、受講者全員が自らの進路について考える機会が増えたことは間違いないし、生と死を見つめる題材に出会ったことから看護職への夢をさらに強固なものとした結果、難関の看護大学に合格した受講者も出た。

「国際化社会を生きぬくには」講座では、各テーマの探究をする中で国際協力に目覚めて、第一学期段階から国際協力NGO活動に身を投じてボランティア活動表彰を受けたりする受講生が現れたり、国際関係学部で推薦入試で合格する者が出たり、東京で行われた「高校生・平和の集い」に参加する受講生が複数出たりした。そのメンバーたちは、さらに校内で国際協力・国際平和に関するポスターを作って周知活動をはじめたり、校内で「国際協力・平和を考える集い」の実施に向けて動くなど、積極的な活動を始めている。<sup>9)</sup>

## 7. おわりに —今後の展望—

筆者の勤務校での「3年生・3単位まとめ取り型」の総合的学習の時間は、まだ開始されたばかりだが、2年目となる平成18(2006)年度には、いきなり講座再編が予定されている。11つあった講座数は、非常勤講師任用や専任教員の異動や持ち時数の問題もあり、9講座に削減され、地理歴史・公民科の関わる「青年期」講座と「総合」講座も統合されて「国際化社会と現代」という講座名になることが決定した。ただ新講座の受講予定者は29名と十分な人数が確保できたことでグループ活動も可能となり、さらに校外活動も出来る予算的措置もおこなったことから、恐らく今年度の両講座の内容を圧縮した内容で講座展開はでき得るであろうと推測される。

平成19(2007)年度には東京都独自設定科目「奉仕」の導入が予定されている。「総合」はそれとの連動をさせるという新しい展開を試みることも可能であろう。そこに地理歴史・公民科が貢献できる部分は大きいと考えられる。今後も、この「奉仕」を含めた「総合」と地理歴史・公民科とのコラボレートの可能性の考察をしていくことが必要であろう。

### 【注】

- 1) 東京都立目黒高等学校新教育課程検討委員会資料より。東京都立の22高校からの調査を実施した結果である。
- 2) 同一学年3単位という事例は他校にも見られる。ただし、その場合は「1単位をキャリアガイダンス的に、2単位をゼミナールの」などという形としており、形式としては分割型ということになる。一方、筆者の勤務校に近いパターンとしては、「3年4単位」という事例がある。これ

は2単位ずつに分けて2講座を必修とする方法である。

- 3) 東京都立目黒高等学校平成15年度入学生240名を対象に調査。
- 4) 筆者担当の講座選択者31名の調査(上記同様の平成15年度入学生)によれば、高等学校での「総合」講座に肯定的評価を下した比率は100%であった。もちろん全数調査ではないので単純には判断できないが、義務教育学校時の「総合」に対する肯定的評価率とさほど変わらないとの感触を得ている。
- 5) インターネット上の「日本食フォーラム」と「日本語学習フォーラム」に参加し、アンケートを実施したグループがある。回答者は殆ど米国の10代後半から20代後半までの人々だったという。日本食については、ナマもの・わさび・納豆などに注目が集まっていたようだ。また、マンガ・アニメについての人気ランキングも作成し、人気が高いものが「サムライ」や「忍者」などを主人公としている作品であり、書き込みもそのようなキャラクターこそが日本の象徴としてとらえられているということが報告された。
- 6) プレゼンテーションや冊子として完成した原稿については、他のグループの作品に対して5段階評価をさせている。たとえばプレゼンであれば、「テーマ」「発表力」「資料」などの評価項目を設けて、それぞれに対しての数値を出させている。
- 7) 事後報告書では、担当楽器についてのレポートだけではなく、「世界に影響を与えた音楽について」という大きな題でのレポートも課した。なお、これまでのプレゼンテーションや冊子作成がすべて電子情報での提出を義務づけていたことから、今回は逆に「手書き」での作成を義務づけた。
- 8) 第5テーマも第4テーマに同じく、「手書き」作成とした。
- 9) 平成16~17(2004~05)年にかなり流行した「ホワイトバンド運動」にからめて、メッセージを書いたポスターを12月に作成した。このような思想を持った活動が筆者の勤務校で見られたのは8年ぶりである。それも校内では影響力のある生徒たちが署名した上で掲示したこともあり、平常時なら掲示物に対してイタズラ書きや破損行為が見られるのが一般的である環境下にあって、3ヶ月経過した現在でも全くその形跡がない。このことは同級生や下級生たちにメッセージがかかり伝わっているものと考えて良からう。また、3月には校内で「国際協力と平和を考える集い」を実施するべく企画中である。そして同じく3月に東京で行われる「国際平和を考える高校生行進」への参加も企画している。